

よい語りわるい語り プロのストーリーテラーということ

もうだいぶ前だが、こんなことがあった。

地方のある町の図書館に招かれて、ものがたりライブをさせてもらった。

そのあと、図書館の仲介で地元の語りのグループのみなさん数人とお茶をした。

そのうちの1人が先生格で、この図書館で語りをする人のための
講習会もしているという。

年はぼくより少し上だと思う。

その人がかみしめるように言った。

「子どもの前で語っていて、今日もうまくいかないなあと思うこともあります。

ざわめきがおさまらないとか、動き出す子がいるとか。

でも、そんなときでも、何人かの子はちゃんと聞いていてくれていて

あとで「おもしろかった」と感想文をくれたりもします。

そういう子が一人でもいてくれれば、ああ、今日はよかったと思えるし、
そういう子と出会うことがお話を語るなによりの喜びです」

そのことばに、聞いていた他の人たちはしきりにうなづき、

相槌を求めるようにニコニコとぼくを見る。

うーん、こまった。

ぼくは微笑みながら「ああ、そうですか」と言うばかりだ。

語りをする人の口から「1人でも喜んでくれる子がいればいい」という
言い回しを聞くのは初めてではない。

聞こえがいいし、賛同する人はけっこういるかもしれない。

でも、これはあくまでアマチュアの発想だ。

招かれて謝金をいただいて語っているぼくは、それでは許されない。

ぼくの最低ラインは、そこにいる全員に楽しんでもらうことだ。

全員とはいかなくとも、1人でも多くの人にだ。

そうでなければ予算をくんで呼んでくれた主催者にも

時間を工面して子どもをつれてきた親たちにも申し訳ない。

だから、(この会場はざわついているな)とか

(聞く体勢になっていないな)と判断したら、まず、その手当に当たる。

「なにかメッセージを届けたい」とか、「今日はこの話をしたい」とかあるとしても

それはその最低ラインをクリアしたうえでの話になり、

話がしにくい状況を見捨てて話を始めてしまうなんてことはない。

医者と同じで、まず痛みをとり、それから治療にあたる。

患者は当然、そうしてほしいはずだ。

その「手当の方法」について、あれこれのノウハウを持っていないければプロではないし、みんなを幸せにできない。

「一人二人の子どもが喜んでくれたからよし」というのは自分の失敗を自分で慰めているにすぎない。

第一、それでよしとする語り手が

「おはなしを聞くのはおもしろい」という子を数人つくれたとして同時に「おはなしをきくのはつまらないと思う子を何十人もうみだした」としたら、むしろ罪深い。

「今日は自分がしたかった話をし、数人の子が聞いてくれた」という語り手はおはなしと子ども間に立って、両者をコーディネートする役割をはたしていない。一方的におはなしの側に立って伝道しようとしている。それは子どものためにも、おはなしのためにも実は不幸なことだ。

で、言い方を考えるとアマチュアはひとつの話をどう語ろうか考え、それがうまくいけばいいのだと考えている。

だが、プロはそうではない。

おはなし会と言う全体がうまくいくことを考えている。

例をあげると、たとえば吉本新喜劇などがそうだが

おもしろい場面がたくさんあってゲラゲラ笑って、終わってから、

さて(今のはどんな話だったっけ?)と思いだそうとすると思い出せない。

言うべきほどの話ではないのかもしれない。

ただ、おもしろかったという記憶だけが残っている。

大事なのはその、おもしろかった、楽しかった、幸せだったという記憶だ。

それがあから、また聞きたい、もっと聞きたいとなる。

だからまた、次回も来てくれるし、たくさんのがたりを聞いて行くうちに聞く側も聞き上手になってレベルアップしていく。

語り手も語る場がたくさんあることでレベルアップしていく。

もちろん収入にもなる。

プロはそういうものだ。

音楽、演芸、文藝、美術、工芸、スポーツ、農業、園芸、漁業 etc…。

どの世界にもプロとアマがいる。

プロはそれで生活をたてている人で、アマは趣味でやっている人だ。

総じてプロの方が仕事がうまい。

そうでなければおかしい。

だが、絶対プロの方がうまいかというと、そうでもない。

明らかにへたなのに人気のある人、逆にうまさは誰もが認めるけれど
お呼びがかからない人などいくらもいる。

練習をたくさんした人がプロになれるわけでもない。

このあたりに、いわく言いがたいものがある。

では、ストーリーテラーのプロとアマはどう違うのか？

しばらくプロのストーリーテラーについて考えていこうと思う。